

加賀藩御大工子弟の江戸遊学

—史料「前田貞幹手記」から—

石野友康・正見 泰

はじめに

加賀藩御大工篠田覚右衛門の子弟が幕府の御大工である平内大隅へ弟子入りしたという史料を見いだしたので紹介することにしたい。周知のごとく、平内家は、四天王寺流の御大工で、幕府作事方大棟梁の家である。代々大隅（守）を称し、慶長年間に吉正・正信父子が木割書「匠明」を記したことで知られている⁽¹⁾。

この史料内容が加賀藩御大工を考える新たな視点を有すると考えられるので、その意味づけも試みたい。

1. 「前田貞幹手記」(延享3年9月28日)の記述と篠田家

(1) 加賀藩御大工子弟の江戸遊学

まずは、加賀藩御大工篠田（笹田）家と平内家との関連を示す史料の記述を提示することから始めたい。

御大工笹田覚右衛門セかれ平八郎、右御当地御用茂為見習度、且又平之内流御大工之家之平之内大隅方江弟子入為仕度奉存候ニ付、於御国相願、召連申候、就夫、先年羽田故十郎兵衛セかれ十郎右衛門・笹田故平四郎セかれ覚右衛門□□□当地召連、為見習候間、今般も其通ニ可申渡与奉存候、以上、九月廿八日 前田等二人様
菅野覚兵衛ハン 氏家九郎兵衛 ハン

(金沢市立玉川図書館加越能文庫「前田貞幹手記」2 延享3年9月28日条)

ここに取りあげたのは、江戸中期、藩の家老役を勤めた前田貞幹の手記の延享3年(1746)9月28日条で、菅野覚兵衛・氏家九郎兵衛の両名から「前田等二人」に宛てた書状を留めた部分である。差出人としてみえる菅野と氏家は、ともに200石の知行を有した藩の内作事奉行⁽²⁾であり、一方の宛先となっている「前田等二人」とは、この手記の記主である貞幹を含めた二名の家老役をさすものとみられる。「諸頭系譜」によれば、延享3年当時家老役は、6人であったが、文面等から察すると、在府の家老役とみられる。この時、在府し、藩主宗辰の側にいる家老役は、西尾隼人克明と前田外記貞幹の二名であった。そのことは、発給文書のなかからも裏付けられる。

内容は、藩の御大工であった篠田覚右衛門の息平八郎を大工としての御用見習をさせるため、平内大隅方への弟子入りをさせたく、国元で願い出、このたび江戸へ召し連れたというものである。本手記の同年9月26日条には、「御大工笹田覚右衛門 御扶持方大工黒田佐助」が江戸に参着し、「御大工渡辺伊右衛門 御扶持方大工城戸吉右衛門」と交代したとの記述があるから、覚右衛門が参府する際に一緒に平八郎を伴ったという事情も確認することができる。

この文面によれば、藩御大工の子弟が平内家に弟子入りしたという例は、この時が最初ではなかった。先年羽田十郎兵衛のせがれ十郎右衛門や、篠田平四郎のせがれである覚右衛門、すなわち、平八

郎の父である覚右衛門自身も見習のため平内家に弟子入りし修行を積んだ経緯があるというから、後述から察してみても、享保頃まで遡ることになる。そうした先例のもと平八郎の弟子入りも許可する方向にあったことがわかる。

「前田貞幹手記」にその後の記述は見当たらないが、おそらく、平八郎は、先例に従い、弟子入りして大工としての修行を行ったものと考えられる。

金沢市立玉川図書館清水文庫「御大工知行帳」によると、羽田十郎右衛門は、享保9年(1724)に召し抱えられて一人扶持となり、翌10年には御大工として切米50俵を拝領した。ついで享保17年には20俵加増されて70俵となり、元文2年(1739)には御大工頭に昇進、役料として五人扶持を下し置かれたが、寛保3年(1743)、江戸よりの帰国途中に鴻巣駅で51歳で没した。

(2) 篠田家の家系

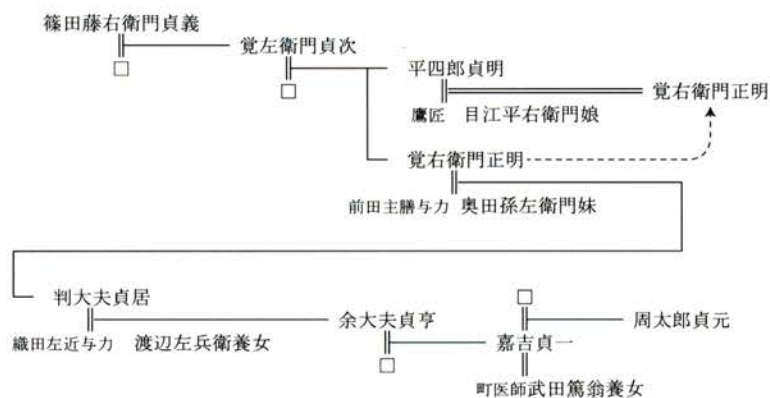
一方の篠田覚右衛門政峯(清水文庫「御大工知行帳」では、始め政明を称したという)は、享保10年召し抱えられ、同15年御大工となり切米50俵を拝領、延享4年には御大工頭に昇進して10俵を加増され、役料5人扶持を下された。十郎右衛門・覚右衛門の両者ともその後御大工頭になっていることから、平内家への修行は、御大工頭への登竜門と考えられなくもないが、その点については、今後の調査により明らかにしていきたい。

なお、覚右衛門は、宝暦9年(1759)9月差し控えを命ぜられている。2年後の同11年9月に許され、切米40俵を得て定番御歩となり、宝暦12年56歳で没した。「御大工知行帳」では、実子判大夫にも言及し、定番御徒として召し出され、その後三十人頭となったと記されている。

覚右衛門の差し控えについては、玉川図書館加越能文庫「諸事被仰出等記」⁽³⁾によれば、覚右衛門は宝暦9年9月6日「勤方綿密ニ無之旨」として同じく御大工安田吉郎右衛門とともに差し控えを命ぜられている。田中徳英氏(以下、単に田中氏)は、篠田覚右衛門と安田吉郎右衛門の差し控えについて、「袖裏雑記」の「兩人儀常々御用方申談綿密ニ無之、勤方不宜趣達 御聴候」などとある文言を援用され、勤務成績が良くなかったため差し控えを命ぜられたと解釈されるとともに、御大工頭が以降約11年間にわたって中断し、かわって西田三郎右衛門・田辺久丞が「御大工棟取」に任命されたことを指摘された⁽⁴⁾。

しかし、この兩人が差し控えを命ぜられた3日後の9月15日に安田又八郎以下5人の扶持方大工が御大工に昇進し、彦作以下5名が扶持方大工となっているなどから考えると、単に「勤方不宜」の問題というよりは、むしろ、政策的な意図により処分が行われたことと見るべきであろう。2年後の同11年9月25日、篠田覚右衛門・安田吉郎右衛門に吉田兵藏(喜六郎殿御御料理人)を加えた3人は「遠慮御免」となり、40俵を与えられ定番御歩を仰せつけられ、その後篠田家は御大工としてではなく、由緒帳を見る限り、定番御歩として藩に仕えることになった。

ここで、篠田家の家系についてふれておきたい。覚右衛門の子孫である篠田嘉吉とその子周太郎に



篠田家系図 (金沢市立玉川図書館「先祖由緒井一類附帳」より)

よる「先祖由緒并一類附帳」（篠田嘉吉 明治3・篠田周太郎 明治4 加越能文庫）が残されていたので、それによって、篠田家がどのような家として藩政期を生き抜き、明治維新を迎えたのか確認しておきたい（上記系図参照）。

江戸時代、加賀藩の御大工や扶持方大工を勤めた篠田家には、三家ある。上記の篠田嘉吉・周太郎家のほか、近江出身で利家の頃から御用を勤めたとの由緒を有し、代々弥三右衛門・弥三兵衛を称した篠田義十郎家、享保期より台頭した篠田弥太郎家がある。三者の篠田家が血脈を同じくする一族であったかどうかについては、ここでは伺えない。

そこで、今話題にする篠田家を仮に覚右衛門家としよう。覚右衛門家は、その祖を寛永3年に没した藤右衛門貞義としている。貞義は、藩の御歩であった篠田太左衛門の弟で、「組柄相望候器量」がなく、「江戸表大工之家元」である平内大隅と所縁があったことから、家職に関する書を伝来するとともに、三代藩主利常に願い出て御大工として小松に居住したことがあったという。いわば、平内家との所縁により御大工となったことを暗示している。貞義は、のちに病身となり石川郡別所村に引越し、ここで没したという。小松に住んだというのは、おそらく利常隠居後ということであろうか、しかし、利常の隠居は、寛永16年（1639）のことであり、となれば、藤右衛門が小松に居住することは考えられない。このように不可解な点もあり、この記述がどこまで真実を述べているかは定かではない。覚右衛門家が、前田家の御大工となった後に平内家との接点を持とうとしたのではないかと解釈するのがよいように思う。

いずれにしても、覚右衛門家が、早くから平内家との関係を強調している点は注目に値しよう。

藤右衛門の子覚左衛門は、「御城中普請方御用」を勤め、伝燈寺再建の際に御大工となったという。伝燈寺の再建は承応3年のこととされているから⁽⁵⁾、そのころ御大工になったのであろう。「三壺聞書」⁽⁶⁾「菅君雑録」⁽⁷⁾などの記録類によれば、万治元年（1658）、江戸城天守台普請に前田家が動員された際の加賀藩の御大工のなかに「笹田覚左衛門」の名がみえる。覚左衛門は、覚右衛門家のなかで活躍の様子が具体的にうかがえる最初の人物となっている。

その覚左衛門の子が平四郎である。平四郎は、元禄2年（1689）に御大工となり、切米50俵を得、享保11年（1726）に没するまでその職を勤めた。次に家督を継いだのが、平四郎の弟、覚右衛門である。先にみたように、この覚右衛門は、享保15年に御大工として召し抱えられ、延享4年（1747）に御大工頭へと出世を果たしたが、宝暦9年に指控を命じられ、宝暦11年御免となったものの、その翌年没した。

次に覚右衛門の跡を継いだのは、判大夫である。判大夫は、覚右衛門の二男で、明和6年に六組御歩となったあと、提灯裁許（天明5年）、定番御歩（天明7年）、薪裁許定役（寛政4年）、などを経て文化元年、新知100石（ほかに役料50石）を得て、三十人頭となり文化11年没した。その後は、組外番頭・定番馬廻等を勤めた余大夫、細工所劔御用、細工者等を勤めた嘉吉（明治4年没）、明倫堂書物出納方御雇御用、済々館教師となった周太郎へと続くが、覚右衛門が差し控えを免除されて以降、覚右衛門家では、藩の御大工を勤めた形跡は見当たらない。宝暦9年の一件は、覚右衛門家にとって大きな転換点となったことがわかる。

なお、延享3年に平内家に弟子入りを願い出たという「御大工笹田覚右衛門セかれ平八郎」がすなわち判大夫であったかどうかについては、手元の資料では判断できず、にわかには判断できない。今後の調査に委ねたい。

2. 史料としての「前田貞幹手記」

(1) 「前田貞幹手記」とは

篠田家や羽田家が平内家と関わり合いをもつことの意味については、後ほど述べることとして、その前に、「前田貞幹手記」やその著者前田貞幹に関しても触れておくことにしたい。

先にも触れたように、「前田貞幹手記」は、藩の重臣前田貞幹の職務日記である。本日記の原本は現在確認されておらず、金沢市立玉川図書館に写本が架蔵されていて、ここでの引用もこれに拠っている。玉川図書館の写本は、明治期に前田家編輯方によって書写されたもので、延享3年から翌延享4年かけて2カ年分、5冊分が残されている。

この手記が書かれたのは、早世の藩主が続いた、いわゆる加賀騒動の時期のことであった⁽⁸⁾。延享2年、6代藩主吉徳が急逝すると、若年の宗辰・重熙・重靖という三人の藩主が短期間のうちに次々と交替する一方、藩では、吉徳の没後、その寵臣であった大槻朝元を藩政の場から退かせ、もとの年寄主導での政治体制に戻すことに努めた。結局のところ、大槻は、延享3年7月に蟄居を申し渡され、ついで翌延享4年に遠島、寛延元年（延享5年）には越中五箇山に配され、この配所で自害した。また、同じく寛延元年には、吉徳の側室で、次期藩主の座に所生の男子（勢之佐）をつけるべく大槻と画策したという真如院（重熙生母とは姉妹）が、金谷の縮所に押し込められて没し、騒動の收拾がはかられた。

本手記は、かかる時代を背景に、藩の上層部に位置した記主の視点から、江戸における藩主ならびに藩政の動きを知るうえで参考にすべき内容を多分に含んでいる記録である。

(2) 前田貞幹とその家系

次に、記主の前田貞幹に触れたい。貞幹は、知行7000石を領した藩の重臣で、通称を外記のち中務を称した。藩の若年寄見習・若年寄を経て延享2年（1745）には藩の家老に就任した。

家老となってからは、八家の横山貴林にかわって在府し、江戸での藩主を支えることが多かった。8代重熙が家督を相続する（延享4年）と、若年寄も兼任した。将来を嘱望されていたが、元来虚弱であったのか、寛延2年（1749）、29歳で早世した。

手記が書かれた延享3年・4年といえ、彼が26、7歳の時であり、家老役として軌道にのりつつある時期であった。

貞幹の家系についても記しておこう。貞幹の前田氏は、加賀藩祖前田利家の6男利豊を祖とする藩主一族であった。利豊の子貞里は、「金沢城代」や「寄合所御用」（「先祖由緒并一類附帳」）を勤め、3代利常に重用され、藩の中樞に位置づけられたことでも知られている⁽⁹⁾。その子貞親は、若年寄、家老、小松城代を歴任し、貞幹の父にあたる次の貞直は、小松城番、定火消、仏殿請取火消、家老を歴任した。貞親も貞直も公務日記を残しており⁽¹⁰⁾、貞親は5代藩主綱紀の貞享3年から元禄15年の、貞直は、吉徳時代の詳細な記述となっている。

貞幹の前田家は、他の前田家と区別して、俗に前田図書家と称している。一方で利家二男利政の系統である前田土佐守家（八家）、三男知好の流れである前田修理家とともに、三前田と称することもある。

八家とは、婚姻を通じて近い関係にあり、貞里の室は長連頼の娘、貞親の室は長尚連の娘、貞幹の室も前田孝行娘などと八家の娘を妻としているなど、文字どおり、八家に準ずる家系でもあった。

（以上、石野）

3. 加賀藩の四天王寺流大工に関する新知見

前述のように、本史料および篠田嘉吉らの由緒書の記述から、加賀藩に四天王寺流をもたらしたことが既に知られている黒田家とは別に、篠田覚右衛門家も平内家との関係があったことが窺われた。

前出の篠田嘉吉らの由緒書の記述にあるように、江戸早期の先祖からでないにしても、少なくとも覚右衛門子息の平八郎以降、覚右衛門家は平内家または四天王寺流と関係があったことは疑いない。

これまで黒田家の衰退後、辰巳家・安田家の系統が藩内の四天王寺流を継承したとされてきた。しかし、辰巳光政は黒田家の弟子筋に過ぎず、安田家は正納が天徳院山門棟札で平内家の弟子筋を標榜している⁽¹¹⁾ほか、平内家との関係を明確にした研究は見られない。したがって、家として平内家との直接的関係を主張する加賀藩お抱え大工の家は、黒田家に次いで覚右衛門家が2例目の確認となる。

ところで、羽田十郎右衛門の実弟は、建仁寺流を加賀藩にもたらしたとされる御大工山上家の養子となった三郎大夫であることから、羽田十郎右衛門も、江戸での修行先がどこであったかによらず加賀建仁寺流との関係が考えられる。一方、篠田覚右衛門がその子同様に平内家で学んでいたとすれば、覚右衛門が、羽田十郎右衛門に次いで御大工頭に就任していることから、当時の藩当局の大工流派に対する考え方は、建仁寺流と四天王寺流の両流派のバランスを図ることにあったと考えられる⁽¹²⁾。

すなわち、藩当局が両流派を平等に扱っていた時期の下限は、筆者の前稿⁽¹³⁾で示したよりさらに降ることとなる。

また、田中氏は、前出の書⁽⁴⁾で、「平内齋部宿祢廷臣」の署名が見える「武家殿閣之図式」に記された「藤原政武」を篠田覚右衛門と推定したが、間接的な証拠を示すに留まっていた。しかし、本史料の発見によって、「武家殿閣之図式」の「藤原政武」が篠田覚右衛門である蓋然性は非常に高まったと言える。翻って、「武家殿閣之図式」は、覚右衛門あるいは覚右衛門家と平内家との関連性を強く印象づける史料ともなる。

一方、田中氏は、「篠田順之は、父の御大工篠田和之から「武家殿閣之図式」を受け継いで」ともしたが、順之を和之の息子とするがその根拠は一切示されていなかった。そこで、筆者らが調査したところ、弥三兵衛和之の嫡子義十郎和憲の由緒書および、その実弟山本勝左衛門楽之の由緒書にも、田中説によれば兄弟となるはずの幸之助順之およびその家族に関する記述が全く無いことから、むしろ幸之助順之が和之の子である可能性はほぼ皆無と考える。

また、筆者らの調査では、定番御徒となった判大夫は覚右衛門の次男であることが判明し、本史料にある平内家に入門したと考えられる平八郎は、覚右衛門の長男であった可能性が高く、後世代の篠田幸之助順之につながる人物であることが推測された。なお、順之が藩お抱え大工ではなかったこと⁽¹⁴⁾から、平八郎の系統の由緒書が残らなかったのは、子孫がお抱え大工から外れたためと説明することができよう。

したがって、加賀藩の四天王寺流大工の衰退時期については、前稿で安田之勝（寛延3年没）以降とされていたが、本史料の発見によって、篠田覚右衛門家が藩お抱え大工の列から外れた宝暦年間まで、もう少し年代が下った時点から始まったと訂正する必要が出てきた。

なお、同稿では、延宝～元禄年間の藩お抱え大工の中で四天王流を標榜する黒田家と辰巳家・安田家が並立し、藩内大工の中でも四天王寺流が数を増していたとしたが、四天王寺流の藩お抱え大工に覚右衛門家も加わるることとなるから、元禄～享保年間も、藩内大工の中で四天王寺流の優勢は保たれていたと考えられる。

おわりに（本史料発見の意義と今後の展開）

本史料の直接的な文面では、これまで知られることの無かった加賀藩お抱え大工の子弟の江戸遊学について、公式な手続きの一端が記されており、江戸期の大工子弟等の国内留学に関して、本史料をはじめ関係史料による今後の研究が待たれる。

また、筆者は、加賀藩の四天王寺流が藩内で枢要な地位にあったのは、寛延の頃までと考えていたが、本史料の記述内容からは、さらに江戸中頃まで枢要な地位を占め続けていた状況が導かれた。すなわち、加賀藩における四天王寺流大工の活動について見直しが必要である、とした筆者の指摘⁽¹³⁾の適確さを強く裏付けるものとなる。

したがって、当該記述箇所自体は、膨大な史料中のごく一部の短文に過ぎないが、これまで知られていなかった加賀藩作事方大工に関する情報を持った非常に重要な記述であり、今後の加賀藩大工の研究に新たな方向性を示すものであると言える。（以上、正見）

〔註〕

- (1) 『国史大辞典』 平内家 へいのうちけ 項
- (2) 金沢市立玉川図書館郷土資料「諸頭系譜」のなかに、内作事奉行として「菅野覚兵衛正応（任期：元文4～寛延2）」、「氏家九郎兵衛堅寧（任期：延享元～宝暦5）」の名がみえる。
- (3) 請求番号16.40-31。17冊。延享4年から明和5年にいたる記録で藩政の動き、特に人事などについて詳細な内容を持っている。
- (4) 田中徳英『加賀藩大工の研究』（桂書房 2008年）63頁
- (5) 「加越能社寺来歴」伝燈寺（日本海文化研究室編集『加越能寺社由来』上巻 1974年 116頁）
- (6) 「三壺聞書」は、元禄9、10年のころ80余歳で没したという、宰領足輕山田四郎右衛門編纂の記録で、利家から利常の時代の加賀藩政に関する詳細な記録である。金沢市立玉川図書館加越能文庫ほか、京都大学附属図書館の谷村文庫、富山県立図書館などに多くの伝本がみられるが、書誌的な検討は十分されておらず、課題となっている。
- (7) 加越能文庫。請求番号16.12-03「菅君雑録」は、江戸中期、藩士高畠定延によるもので、利家誕生から延享4年までの記録である。おそらく家伝なども参考にしながら記したものと考えられる。高畠家は、尾張出身で、利家正室芳春院ゆかりの家であり、高畠定吉室は利家の妹である。
- (8) 前田貞里については、佐々木潤之介氏も『大名と百姓』（中公文庫 1974年）において、4代藩主光高の没後、利常と貞里の二人三脚で藩政運営を行っていたこと、慶安4年に突如閉門を命ぜられたと改作法実施前後の藩政のながれのなかに貞里を位置づけている。また、木越隆三氏は、改作法期の重臣たちの発給文書を検討するなかで、没後貞里を中心とした年寄衆再編が進んだと指摘し（「加賀藩改作仕法の基礎的研究（慶安編）」『石川県立金沢錦丘高等学校紀要 第22号』1994年）、筆者の一人の石野も金沢城代としての貞里について触れたことがある（金沢城研究調査室『金沢城代と横山家文書の研究』2007年）。
- (9) 加賀騒動については、藩政のなかに位置づける試みを行った若林喜三郎氏の研究（『加賀騒動』中公新書 1979年）があり、最近では、木越隆三氏が当時の大名権力の政治意志決定のあり方より加賀騒動を読み解かれた（「加賀騒動」福田千鶴編『新選御家騒動 下』）。なお、石野も前田土佐守家資料館『前田土佐守家資料館図録』（2002年）や『金沢市史』（通史編2 近世 2005年）などで触れたことがある。
- (10) 前田貞親の日記としては、加越能文庫に貞享3年より元禄15年にいたる「前田貞親手記」（請求番号16.41-82）が、貞直のものとしては「前田貞直手記」（享保18年～寛保2年、請求番号16.41-100）・「前田貞直筆記」（享保19年～寛保3年、請求番号16.41-100）がある。両者とも前田家編輯方による明治期の写本である。
- (11) 棟札では「堀内吉政五代 安田善次郎正納」と記すだけであるから、正納が平内家と直接的な関係があったとは思われない。

- (12) 覚右衛門は、元文4年(1739)大野湊神社棟札では「建仁寺流大西政乗門弟」としており、御大工頭就任以前に両流派に通じていた可能性が指摘できる。羽田十郎右衛門も同様の可能性がある。
- (13) 正見泰「加賀藩の御大工頭への昇任と大工流派の盛衰に関する研究－清水文庫および渡部家文書の大工史料の検証に基づいて－」(金沢工業大学学位請求論文 2012年)ほか
- (14) 「御大工知行帳」(請求番号18.6-76)および「御大工頭御大工被召出候名前等覚書帳」(請求番号18.6-79)による。ともに清水文庫所収(金沢市立玉川図書館蔵)で、両史料を併せると、前田利家の代から明治初年に至る加賀藩お抱え大工の名前、俸禄、出自等をほぼ網羅的に知ることができる。
- ※ 請求番号は、金沢市立玉川図書館